

高校生による地域の伝承文化研究 ― 國學院大学の取り組み ―

小川直之*

Naoyuki OGAWA

1. 今、なぜ「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストなのか このコンテストの趣旨は、高校生が自主的に、自分が住む地域あるいは通学する高等学校の所在地域などに伝わる「伝承文化」に目をむけ、その内容を实地に調べたり、体験的に修得したりすることで、地域文化がもつ意味を改めて考え、学ぶ。そして、その成果を評価することで、活動の質的向上と活性化をはかることにある。

平成 17 年度が第 1 回コンテストで、平成 27 年度は第 11 回を実施した。第 1 回から農林水産省の後援をお願いしているのは、各地の農山漁村には長い歴史をもつ伝承文化が受け継がれているからで、高校生たちがこうした文化に関心を持ち、調べてまとめる活動は、農山漁村の振興、活性化にもつながると考えたからである。このような意図をもつコンテストの背後には、地域社会の少子高齢化の進行があることはいまでもなく、平成 17 年には、すでにこうした社会状況が目に見えるかたちで現れていた。現在は、このことはさらに深刻な問題となっていて、「地方消滅」の時代が訪れるとか、リニア時代には一層過疎が進むのではないかなどの危機感がもたれている。

2. 國學院大学がこの取り組みを行う理由 「地域の伝承文化」というのは、日常の生活のなかで、食文化や生活様式、行事や祭り・芸能、伝説や昔話、言葉などとして受け継がれているものである。こうした内容は、大地に根付いている「水土文化」と近似しているが、國學院大学は、かつて柳田國男や折口信夫といった民俗学の第一人者が教授を務めており、卒業生には多くの民俗研究者、地域文化研究者がいる。大学は、この学統を受け継ぐだけでなく、高校生たちの教科外の地域研究、地域文化の再評価にも寄与したいと考えてのことである。大学活動として地域の伝承文化に特化した取り組みは他に例がないが、類似の取り組みとしては、林野庁が平成 14 (2002) 年から実施している「聞き書き甲子園」がある。これは「森や海・川の名人」からその技などを聞き取って学び、内容をまとめる活動である。

3. 「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストの概要と考え方 コンテストは國學院大学と高校生新聞社が主催し、農林水産省・文部科学省・全国高等学校文化連盟その他の後援により実施され、現在まで表(次頁)のような応募があった。近年は 500 から 600 件の応募があり、応募者は北海道から沖縄県まで全国にわたっている。応募は個人活動の成果だけではなく、高等学校によっては、生徒の夏休み中の地域研究と位置づけたり、郷土研究部・放送部などの課外活動として取り込まれたりしている。

賞は祭・伝統行事・郷土料理・方言などの調査研究を行う「地域研究部門」、昔話・伝説など民話の調査研究を行う「地域民話研究部門」に分かれ、それぞれの部門において、団体・個人別に最優秀 (1)・優秀 (2)・佳作 (2)・入選 (5) の各賞 (カッコ内は対象数) が授与される。各部門最優秀賞の中から 1 点を「折口信夫賞」として選定する。この 2 部

* 國學院大学文学部

門の他に、学校あるいは部活、クラスなどが組織的に取り組むシステムを構築したり、教科教育とは異なる特色ある成果をあげたりしていることを対象とする「学校活動部門」を設けている。

4. 高校生による伝承文化研究 このコンテストの意義は、高校生が地域の文化や歴史に目を向け、その中から「伝承文化」を発見すること、こうして課題を明確にし、課題について自らが調査研究を行うことで、その実態と問題点を見出して考察すること、さらに収集した情報や資料をまとめ、論理立てをおこなった結果を成果としてまとめることにある。

地域の伝承文化を対象として、地域社会の過去や現在を、自分の足と手、目と耳で捉えて欲しいというのが主催者の願いである。インターネットなどウェブ上には多くの情報があって、手軽に地域文化情報も入手できる時代となっている。ここからのコピー&ペーストによって、簡単にレポートが作成できるが、主催者としては、コンテストではウェブ情報はあくまで検索段階のもので、自らが地域の伝承文化の現場に足を運び、これを担っている方々と交流を行いながら、オリジナルレポートをまとめることが大切であると主張している。

今までのコンテストの中から優れた作品をいくつかあげると、東京都中央区の佃島で祀られている住吉神社の祭礼を取り上げたレポートは、祭礼を行う組織と内容、祭りに集う人々の動向を実地調査からまとめ、これをもとに佃島の地域活性化への提言もまとめ、さらにこのレポートを佃島の方々に見てもらって評価を受け、これらの全体をまとめたものだった。また、沖縄県の綱引き行事を取り上げたレポートは、中学生の時から調査を始めたもので、実地調査によって行事内容と現状を適確に把握したものであった。このレポートはA4版で400頁にわたる力作であった。静岡県三島市の湧水を取り上げた高等学校の郷土研究部もあった。富士山の雪解けの伏流水の湧水を、その実態と生活の中での利用を捉えたもので、優れた内容となっていた。

5. コンテストの成果 毎年のコンテストで優秀な成績をおさめ、受賞した高校生たちは、自分たちの活動に自信をもつようになっているが、そればかりなく、受賞と作品内容が地元の新聞に取り上げられて注目されている例も多い。地域産物の特性を活かした食品を考案する活動で受賞したグループは、これを商品化している。また、岐阜県のある高校は、受賞した作品の内容を岐阜県グリーン・ツーリズム推進連絡会議で発表する機会を与えられたという例もある。山形県のある高校は、学習内容に「地域文化学」を掲げて自主的な研究を奨励し、この活動が「地域の伝承文化に学ぶ」コンテストにつなげている。

コンテストの成果は、顕彰や報道だけでなく、地域の活性化や高等学校での学習の深化に連動するなど、さまざまな結果を導き出している。主催者としては、長期的な展望の中での成果を期待しているが、予想以上に早く成果が出ている例もある。

応募の状況

回	年	応募件数	応募校数
第1回	平成17年	133件	33校
第2回	平成18年	244件	30校
第3回	平成19年	85件	38校
第4回	平成20年	153件	38校
第5回	平成21年	417件	36校
第6回	平成22年	474件	41校
第7回	平成23年	318件	45校
第8回	平成24年	650件	36校
第9回	平成25年	538件	35校
第10回	平成26年	620件	45校
第11回	平成27年	640件	47校